医療における感動の力とチームワークの力

毎年 1 月になると思い出すのが、阪神淡路大震災である。当時、私は医師になって 5 年目、神戸大学大学院 1 年であった。そして当時、生後数ヶ月の乳飲み子であった長男の額に、何やらにきびらしいものが見えてきた今、時の流れを実感する。あの朝、想像を絶する激しい揺れの中で、私と妻は真ん中で寝ていた長男をかばい長男におおいかぶさったおかげで偶然、頭上のテレビや私の自慢のステレオセットの直撃を受けずに生命をつないだ。同級生の一人は大変悲しい事に彼女の大好きだったたくさんの本の下敷きとなって亡くなった。

多数の人命を奪う大災害は人心を荒廃させる。当時、身近なところで盗難被害を多数聞いた。神戸の街に覆い被さるようにしてあった重苦しくすさんだ空気を思い出す。

しかし、その空気の下、暖かなぬくもりのあるコミュニティーが自然発生していた。避難所では見知らぬ者同士が旧知の間柄のように助け合った。病院や救護所では、「人を助けたい」と必死で働く医療者達の、憑かれたような眼を見た。このような人々が存在したおかげだろうか、米国のハリケーンの際にあったような暴動は発生せず、神戸は見事に再生した。窮地に追い込まれた時の日本社会のバランス力は間違いなく世界に誇れるものであろう。

私は今、日本の医療制度は当時の神戸の街と同様の危機を迎えつつあると感じている。大地震の前兆の予震が続いている時期であろうか。紙面の都合上、エビデンスは示さないが、多数のデータ、証言、そして実感が、この悲しい予測を正当化している。この和歌山における血液内科診療も日本の医療が向かう大きな流れから無縁ではいられない。

一般に組織が危機に直面すると最も脆弱な部分に過負荷が加わる。我が和歌山医大血液内科は開設以来 8 年目とまだ若い医局であり、その歴史や人的資源は決して磐石なものではない。リーダーの一人として、これからの激動を果たして乗り越えられるのだろうか、と思わず自問してしまう。

しかし、我々にはあの神戸の地にあった力強いチームワークの力が備わっていると感じている。そしてこの力を元に苦難を乗り越え、発展、繁栄する機運を感じている。今はいわば種子の時期である。

私は医療者には「感動力」と呼べるものが必要だと感じている。病者の不運に同情して涙し、医学・医療、人的環境の限界に憤慨し、患者が助かったと言っては大いに喜び、感謝の言葉を聞いては、また、泣く。先日、退院を目前に控えた患者から「白血

病が再発したとき、先生に、大丈夫、頑張りましょう、と励まされて、生きる力が沸きました。」と感謝の言葉を頂戴した時、不覚にも涙がこぼれた。

このような感動の力は医療者個人にとっての driving force であると同時に、医療者同士のチームワークの源であると思う。

天の配剤か、我々の科、我々の病棟には感動の力に富んだ面々が集結している。中熊教授の慧眼と我々の幸運に感謝したい。病棟医長を拝命して 1 年。各先生方、病棟看護スタッフの面々、薬剤師の先生方、輸血部スタッフの面々、血液検査室の方々、その他様々な方々のチームワークの力で、種々の環境整備、改革を進めることが出来た。また、これらの改革は後に続く若い研修医達の教育環境の整備でもある。

改革の一例を挙げると、病棟薬剤師が病棟での薬剤業務に関してリーダーとして活躍してくれるようになった。この中には抗がん剤のミキシングも含まれる。病棟看護スタッフにより、側管点滴が行われるようになった。これらにより、医師は以前にも増して、患者病態の把握、治療手技および指示、治療の最適化のためのカンファレンス等に専心できるようになった。また、病棟ナース、薬剤師、医師とで勉強会を開催し、知識・技術とともに職種間のコミュニケーションも向上したように感じている。他にも様々な改革があったが、割愛する。いずれも、皆の理解とチームワークで可能となったことばかりである。心から感謝したい。

（松岡　広）